慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	対立の力学 : 新聞のなかの文芸小品
Sub Title	Dynamik des Gegensatzes : Kleinform in der Zeitung
Author	井戸田, 総一郎(Itoda, Soichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.43, (1982. 12) ,p.331- 349
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	塚越敏教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00430001-0331

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

対立の力学

――新聞のなかの文芸小品――

井戸田総一郎

ベルリーン夕刊新聞第十二号に、『病院での出来事』というユーモラスな逸話が掲載されている――

つい最近馬車にひかれたバイアーという男は、これまでにもう三回も同じような目にあっていた。そのため、枢密顧問官K氏が病院に事情を調べに来たとき、きわめておかしな誤解が生じたのである。まず、男の両足がねじれ血に染っているのに気づいて枢密顧問官が、足を負傷したのかとたずねると、男は、『この足は、もう五年もまえのことですが、やはり別の医者の馬車にひかれたのでございます』と答えた。しばらくして、枢密顧問官の横にいた医師が、男の左目がつぶれているのに気づいて、馬車の車輪が左目にあたったのかとたずねると、男は、『もう十四年もまえに、この目はある医者の馬車にやられたのです』と答えた。さらに男の肋骨の左半分が痛々しく切除されており、背中全体がねじれているのがわかったときには、居合わせた人々はさすがにびっくりしてしまった。枢密顧問官が、肋骨がこんなひどい状態になったのはその医者の馬車にぶつけられたせいなのかとたずねると、男は、『いいえ、その医者のせいではありません。もう七年もまえのことですが、それとは別の医者の馬車にひかれて肋骨は駄目になってしまったのでございます』と答えた。――そしてとうとう、つい最近おきた事故では、男の左耳の軟骨が聴覚器官のなかにめりこんでしまったのだということが判明したのである。――枢密顧問官は今回のこの事故についても男から事情を詳しく聴取したのであるが、この男の冗談めかしたなげやりな話し振りをみて、同室で病いに伏っていた重症患者までもがふきださずにはおれなかったのである。――さて男は回復した。道を歩くときに医者たちに用心していれば、彼はこれからも生きのびることができよう。(1)

ベルリーン夕刊新聞はクライストが企画し編集した新聞である。この新聞は一八一〇年十月一日に刊行されてから翌年の三月三〇日までのわずか六ケ月で廃刊のやむなきに至っている。協力者との不和や検閲当局の執拗な圧力、それに公報の掲載権をめぐる既存の有力新聞との確執などが、その主要な原因であったといわれている。[2] だが、短命で絶えたとはいえ、夕刊新聞は当時としてはかなりユニークなものであったし、新聞史上の面からみても興味深い現象であった。

夕刊新聞は「あらゆる階層」を対象とする「大衆紙」として企画され、[3] 日曜日を除く毎日刊行された。ベルリーンの二大特権新聞であったフォスとシュペーナーは週に三日しか刊行されておらず、夕刊新聞はベルリーンにおける最初の日刊新聞となった。また、当時は新聞といえば予約購買が通例であったが、夕刊新聞は本格的な一部売りを試みてもいる。一部売りがドイツに定着するのは一八三〇年代に入ってからのことで、クライストの新聞はその先取りといえるのである。それにこの新聞には、ベルリーン及びその周辺で起きた殺人・強盗・事故の類を扱った三面記事や、町のうわさ話とか気球打ち上げなどのアクチュアルな記事が多く掲載されているが、当時の新聞にはこうしたローカル・ニュースが紙面に載せられることがなかったのである。夕刊新聞は発刊当時、売り場に警官が出動するほどの人気を博したが、その主要な魅力はこのローカル・ニュースにあったといわれている。[4]

クライストが販売方式や記事の内容の面でこうした斬新な手法を取り入れた理由のひとつは、既存の新聞にはないアイデアを持ち込むことで、新聞を大量に売りさばき、大きな利益をあげようとするためであった。当時、経済的に極度に逼迫した状況に追い込まれていたクライストは、新聞の売り上げによってともかく生計を安定させようとしたのである。クライストは検閲の圧力にしばしば彼らしくない妥協を繰り返していくが、[5] このことは新聞の発刊にまつわるこうした事情に起因するものといえよう。だが、夕刊新聞の発刊の理由を経済的なものにのみ求めることはやはり一面的で

あろう。一八〇九年に書かれた『フランス・ジャーナリズム教本』のなかで、クライストは世論を巧みに操るナポレオンの新聞政策を激しく批判しながらも、新聞が読者に及ぼす絶大な影響力に強い関心を示しているのである。(6) クライストが憎悪の対象としていたナポレオンのおかげで新聞の効果に目覚めさせられるという逆説をここにみてとれるのであるが、(7) ともかくこうしたことも彼を新聞に向かわせる大きな要因であった。

ところで、夕刊新聞をめぐる研究は、ヘルムート・ゼンプトナーのすぐれた検証的研究があるにもかかわらず、七〇年代に入るまで十分な展開をみなかった。だがユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換』をひとつの契機にして、市民社会の成立度を測るメルクマールとしての「市民的公共性」の確立のプロセスと、そのなかで新聞や雑誌が果した重要な機能が問題とされるようになり、(8) クライスト研究のなかでも夕刊新聞にたいする関心がにわかに高まり始めている。そのひとつの成果が、ディルク・グラートホフの『ベルリーン夕刊新聞と検閲との確執』という論文である。夕刊新聞が〃キリスト教ドイツ食卓協会〃の機関紙であり、プロイセンの近代化政策に反対するユンカーたちから成る党派の宣伝機関であったのか否かをめぐって従来から論争が交されてきたが、(9) グラートホフの研究の成果は、検閲という視点を導入することによってこの問題に一応の決着をつけた点にある。検閲の問題に端的に顕われる当時のプロイセンの近代化政策の「閉鎖性」と、それを公論の場にもたらそうとするものとしての夕刊新聞という構造が明らかにされたのである。「……賢い政治家であれば、世論を管理したり支配したりなどせず、できる限り世論と一致し、世論と了解し合うように努めるであろう」(10) という一八一一年一月九日の夕刊新聞に載ったルドルフ・ベッケドルフの言葉に、グラートホフはこの新聞の基本的性格をみようとしている。こうした立場から彼は、夕刊新聞を「世論の形成を促し、そこから具体的な政治に影響を及ぼすための機関として作られたもの」(11) と定義しているのである。

だが、こうした文芸社会学からのアプローチは、夕刊新聞に掲載されている逸話を始めとする文芸小品が新聞のなかでどのような機能を果していたのかという、この新聞の構造や意図をみていくうえで欠かすことのできない問題に十分論及していない。『世界の歩みについての考察』などの小品は、従来から新聞というジャーナリスティクな媒体とは無関係に、あるいは意図的に無視されて読まれてきた。もちろん「神秘化する傾向の強いドイツのゲルマニスト達における」解釈に異義を唱え、これらの小品を「日刊紙のための臨時の仕事」とみなす研究もなくはなかったが、(12)それも示唆にとどまるのみで、新聞との関連は具体的に分析されなかった。

本論のテーマは新聞のなかにおける文芸小品の機能を明らかにすることにある。ただ限られたスペースのなかで、夕刊新聞に載せられた政治記事や劇評などを取り上げ、それらと文芸小品との関係を詳細に分析することは不可能である。そこでここでは、文芸的な要素と社会批判的な要素とが巧みに結合されているという意味で興味深い『最新の教育構想』を主に取り上げ、その分析を通じて夕刊新聞に掲載されている文芸小品の特質の一端を明らかにすることにしたい。

『最新の教育構想』は夕刊新聞に五回に分けて掲載されている。はじめは十月二九日、三〇日、三一日と連載の形で発表され、後半の二回は一一月九日と一〇日であった。一一月九日の紙面には、次のような夕刊新聞編集部からの但し書きが添えられている——「夕刊新聞二五号、二六号、二七号に載った論稿をもう一度通して読んで下さるように読者諸氏にくれぐれもお願い致したいと存じます。使いの者が原稿を一枚紛失してしまったために、この論稿を続けてお伝えすることに支障を来たしたのであります」。(13)この但し書きの主旨は、前半三回の掲載分と後半二回のあいだに一〇日ばかりの日があいたので、そうした事態に至った理由を述べ、同時に前半部に改めて読者の注意を促す点にある。だ

が、この但し書きは、たんにそうしたことばかりでなく、この小品が途切れなく一気に読まれることをクライストが強く期待していたとも読むことができる。この点は、この小品をみていくうえでのひとつのポイントである。

ヴィルヘルミーネ・フォン・ツェンゲや友人などに宛てられたクライストの初期の書簡やエッセイのなかには、よく指摘されるように[14]、日常のさまざまな現象にひそむ問題を自然界の法則から類推して考えるように誘っていく手法をみてとることができる。こうした類推による手法は『最新の教育構想』にもみられ、それがこの小品の構造そのものを形づくっていくのである。

この小品は「実験物理学[15]」の話から始まっている。ここで取り上げられるのは、「帯電していない（中立の）物体を帯電している物体の……磁場に近づけると、この中立の物体は突然帯電し、しかも反対の電気を帯びるようになる」という現象である[16]。しかも、この現象における特徴的な出来事として、「接触し合うふたつの対をなす物体のあいだには、消滅していたもとの均衡を回復しようとする傾向」（傍点筆者）がみられる点が指摘されている[17]。クライストによると、たとえばプラスの物体に帯電していない物体を近づけると、帯電していない物体はプラスの物体の「過剰電気」を受け入れることになり、その結果ふたつの物体は「均衡を取り戻し、電気の点でいえば完全に等しくなる」とのことである[18]。クライストのこうしたレトリックを用いた表現が当時の自然科学の水準からみて正当かどうかは別として、プラスがマイナスを、マイナスがプラスを呼び起こす現象が、失なわれていた均衡を取り戻すひとつの運動としてとらえられている点には、注意しておかねばならない。

自然界の現象を述べたすぐあとで次のようなことが言われている――「わたしたちの知る限りではまだほとんど関心を向けられていないものの、この注目すべき法則は実はモラルの世界にも見いだすことができる」[19]。ここでいうモラル

とは、制度としての道徳というよりは、人間の心の動き一般を示す広い意味で用いられている。自然の現象から類推して、人間の精神界にも「相手がプラスの条件をもっていれば自分はマイナスの条件を得、相手がマイナスの条件をもっていれば自分はプラスの条件をえる」[20]という現象がみられることをクライストは例をあげて示していく。たとえば次の例のような場合――

ある人がわたしに、外を歩いている男はビヤ樽のように太っているという。ほんとうのところは、この男の太り具合というのはまあまあというところなのだ。でも、わたしは窓辺に歩み寄ると、この誤りを正すだけでなく、やつは棒のようにやせ細っているじゃないか、といってしまうのである。[21]

相手が事実に反したことを言うと(「ビヤ樽のように太っている」)、それを否定するのに対極のこと(「棒のようにくせ細っている」)を言うことで、バランスを取ろうとする現象がとりあげられている。これは、「他人がなにか言うと、自分はそれとは逆のことを言ってやろうという気になる」「誰もが経験から知っている」現象の例としてあげられている。[22]プラスとマイナスの関係を読み取らせようとするあまり、やや誇張した表現となっていることは否めない事実であるが、しかし、こうした極端な現象はクライストの好んで取りあげるものでもある。彼は、こうした現象にみられる法則を「矛盾の法則」あるいは「対立の法則」と名づけている。[23]

クライストは対立・矛盾の法則がこうした言葉のやりとりにみられるだけではなく、「より広汎に」人間の「感情や情動、性質や性格にもあてはまる」[24]ことをポルトガルの船長についての逸話とか、自分自身の体験談を語るという形で指摘していく。ここではポルトガルの船長についての逸話を引用しておこう。この逸話では、ひとりの人物の行動を通して、もともと帯電していなかった心理状態があるきっかけで突然帯電し、しかも当初の気持とはまったく逆の、対極の方向に移行してしまうという出来事が描かれている――

ポルトガルの船長は、地中海で三隻のヴェネチチア船に攻撃されたとき、全士官と海兵を前にして意を決し、砲術曹長に「いいか、甲板上でひと言でも降伏という言葉が発せられたら、おまえは他の命令を待たずにすぐに火薬庫に行き、この船を爆破しろ」と命令した。陽が沈む頃まで優勢な敵勢と闘い続けたが、もう力つき、船員たちの誇りも満たされると、士官たちは全員で船長のところに来て、船を捨てるように求めた。船長はこれには答えずにうしろを向いて、砲術曹長はどこにいるのかとたずねた。船長があとで語ったところによれば、このときの彼の気持というのは、自分の下した命令を即座に遂行するように砲術曹長に伝えることであった。だが、当の砲術曹長は火のついた火縄をもって、樽のあいだをすり抜け、もう火薬庫のどまん中に立っていた。船長はこれに気づくと、恐怖に青ざめ、砲術曹長の胸もとを突然つかみ、すっかり危険を忘れて、彼を火薬庫の外にひきづりだした。それから罵詈雑言をはきながら火縄を踏み消し、海のなかへ投げ捨ててしまった。そうして船長は士官たちに言った、「降伏したいなら白旗をあげろ」と。(25)

ここで描かれているような現象は、夕刊新聞に掲載されているいくつかの逸話にもみることができる。たとえば『大酒飲みとベルリーンの鐘』という小品では、手のほどこしようのない大酒飲みの兵士にまつわる話が物語られている。この兵士は大酒を飲んだために罰を受け、これからは態度を改め酒はやめると誓いを立てたのであるが、ところがそれから四日目にはもう泥酔しているところを捕られてしまうのである。兵士は尋問を受けることになるが、彼によると酒を飲んだのは自分のせいではないという。教会や塔の側を通りかかるたびに、そこから鐘の音が聞こえ酒を飲むように誘惑されたのだというのである。それでも兵士は二回までは誓いを思いだしてがまんしたものの、とうとう三回目は悪魔に導びかれるように酒場に入り酒をあおってしまった、ということだ。(26) この逸話にも、まえに引用したものと同じように、ひとりの人物の行動を通して、当初の決意とはまったく逆の方向へ移行してしまう出来事が描かれている。しかもなぜそうなってしまったのかという理由は、いずれの場合も当人たちはうまく説明できないのである。彼らは自分の運命にただ当惑するばかりである。クライストは『最新の教育構想』において、読者の「経験」に呼びかけながら、日常

の瑣末な出来事にみられる事柄から話を始め、逸話へと話題を進めていくなかで、人間の心理にみられる不可思議な領域に光をあてているのである。自然界にみられる対立の法則から人間の心理を類推的に読ませることによって、読者をたくみに心理観察へと誘っているといえるだろう。

ところでクライストは、ポルトガルの船長の逸話や自分自身の体験談を語ったすぐあとで「こうした法則を正しく理解している人の目には、哲学者たちをひどく悩ましている次のような現象はもはや奇異なものに映らないだろう。つまり偉人はたいてい教養のない取るに足らぬ親から生まれており、また偉人が養育する子供はどこからみても依存性の強い小者であったりするということなのだ」[27]と述べ、自然や人間の精神界にみられた対立の法則から類推して、教育という社会問題を論じていこうとする。

クライストはまず、「悪い仲間をもつと良い徳性は損ねられてしまう」という定説には「制限を与えなければならない」と述べている[28]。というのも、「若者というのは、やくざな人間の行状をみると誘惑されることが多く、悪に走る可能性もある」が、しかし、「若者が率直に反撥して、やくざな人間に誘惑されずに、武装して悪に立ち向かう場合もたくさんある」からである[29]。クライストは、こうした意見を「逆説」だと思う人はいちど「刑務所」か「拘置所」にいってみるとよい、と勧めている[30]。犯罪者でいっぱいの牢のなかは「非道な行為」が横行し、ついには「殺人」が起きてやがて全員が死んでしまうように思われるかもしれないが、実際にはそうしたことは起きないどころか、「以前は秩序にことごとく敵意を抱いていた」犯罪者たちが、牢のなかでは「想像もできないような転換をとげ」「神聖なこの秩序の、衆目の一致するところの維持者」になる場合が多くみられるのだ、とクライストは指摘している[31]。

こうした刑務所などにみられる現象を述べたあとで、クライストは学校の問題について具体的な提案を交じえながら

言及していく。この部分がこの小品の主題を構成しているのである。クライストは、これまでみてきたような現象を踏まえれば、「徳を説く学校」(32)が有徳で善良な人間を作るとは限らないと言えることになる、と主張する。「徳を説く学校」は良い模範を並べることで影響を及ぼそうとするが、そうした「模倣衝動」(33)に期待した方法は、これまで人間の進歩になんら有益なものをもたらさなかった、と批判される。このことは自然界のなかにプラスがプラスを呼び起こすという現象がないのと同じことである。むしろ、プラスとマイナスの関係からみれば、悪徳を説く学校こそが立派な人間を生み出すといえるのだ、とクライストは言う。こうした立場から彼は、「いわゆる悪の学校を、正確に言えば、悪を説くことによって徳を教えるという対立の法則に従った学校」(34)を設立するように提案するのである。この学校ではあらゆる悪が教えられることになる。それには教師は、戒めによる効果をねらうばかりでなく、「生身の行動」によって、さらに「仲間としてじかにつき合うことによって」影響を及ぼそうとすればよいのである。(35)「私欲」や「凡庸」それに「仲間のあいだや路上で学ぶことのできる諸々の悪を教える」のにわざわざ教師を雇う必要はないと、クライストはいう。(36)「不潔」や「乱雑」などは「わたしの妻」が講義し、「放蕩」「賭博」それに「飲酒癖」や「無精」は「わたしの領分」というわけである。(37)最後に授業料も格安であると付け加えられている。(38)

もちろんクライストはこうした「悪の学校」を実際に作ろうと考えていたのではない。この点は注意されなければならない。ここで問題なのは、「悪の学校」を「徳を説く学校」と「接触」させることによる効果なのである。自然現象について述べられているはじめのところで、プラスの物体が帯電していない物体のなかにマイナスの電気を呼び起こすとき、プラスの物体の「過剰電気」は相殺され、その結果、相方の物体に「均衡」が回復されることになるという点が指摘されていた。こうした現象から類推すれば、クライストは悪の学校を意図的に賞揚することによって、「徳を説く

学校」にみられるいきすぎた「過剰電気」を相殺し、善悪の失われていた「均衡」を回復させようとしている、といえるだろう。「徳を説く学校」にみられる「病んでいる」[39]「過剰電気」とは、善は善によってのみ生みだされるという固定観念であり、またそうした固定観念に基づく「教育の力にたいするまったく過大な評価」[40]である。クライストは「子供はほかのものに依存しない独自の発展能力と内面形成のための規範を己の内部にもっているのだ」[41]と述べている。「いわゆる良い模範」とか「月並みの戒め」による教育は[42]、善と悪の相方が混在しているなかを「己の内部」にある規範に従って生きることで、独自の発展をとげる可能性を子供から奪うことになる。クライストは、善にのみ片寄りがちな価値観やそうした価値観によって支えられている「徳を説く学校」に、あえてまったく逆の「悪の学校」という構想を対置することによって、子供の「自由」な「生」[43]という初源的な問題に読者の関心を連れ戻し、そこから教育の問題を改ためて考えるように読者を誘っていこうとしているのである。

「悪の学校」という構想をこうした対立の力学の視点から読ませようとしていたことは、クライストがこの小品に寄稿という形態をとらせている点にもあらわれている。寄稿者はC・J・レファーヌスというジャン・パウルの『レファーナと教育論』を暗示する架空人物であり、クライストはこのレファーヌスに「悪の学校」という構想を語らせている。夕刊新聞編集者としてのクライストは、最初の掲載日である一〇月二九日の紙面の冒頭で、レファーヌスの構想とそれにたいする読者の反応についてあらかじめ次のような評価を下している——「なにをしてもよいから食物（たべもの）にありつきたいとか、なんとしても目立ちたいとか、いずれの欲求や欲望も人間を惑わして思いもつかぬことを考えさせるのである。またそのためにこの新聞に非難の声が寄せられるのであるが、これがまた実に滑稽なものなのである。こうしたことについて先日わたしたちのもとに届いた次の論説を皆さんに読んでもらって、よく吟味して頂きたいと思う」[44]。こ

こには、レファーヌスの構想を食欲とみえの産物とし、意図的に低く評価することによって、悪の学校という構想がそれ自体として受けとめられることのないように配慮しているあとを認めることができる。また。この構想が「思いもつかぬ」ものとして紹介されていることは、読者の好奇心をそそる機能をも果している。だが同時にこの序言のなかで、夕刊新聞編集者としてのクライストは、悪の学校という構想を非難するような見方や価値観をあらかじめ「実に滑稽なもの」とし、それらを「吟味」するように読者に求めているのである。読者は、こうした形で、この構想をばかげたものとみなして無視することを冒頭のところで封じられてしまっている。クライストは、読者のひとつの反応を先取的に示し、それをあらかじめ批判することによって、教育にたいする読者自身の硬直化した価値観を問題化するというこの構想のねらいの文脈のなかに読者をたくみに誘導しているといえよう。

ところで、この小品は、これまでにも繰り返し触れてきたように、自然、心理、社会という三つの異なった領域に対立の法則という同一の法則を適用し、これらの領域間を類推的に読ますように構成されているのである。クライストは一一月九日の紙面に掲載された但し書きのなかで、この小品を途切れなく一気に読むように読者に懇請していたが、その理由はこうした構成上の問題に起因している（一一月の後半の二回の掲載分には教育に関する部分のみが載せられていた）。自然観察、心理観察、社会観察を同時に遂行させようとするクライストの意図は、類推の構造を『最新の教育構想』の場合ほど、はっきりとみとめることはできないにしても、夕刊新聞の紙面構成に託されているねらいを解明するうえで示唆に富んでいる。

クライストはある書簡のなかで次のようなことを述べている――「鼓手の記事のようなものは（……）、民衆を楽しませ、また、民衆のために直接書かれていない他の記事も通読するように民衆を刺激するためのものです」[45]。この書簡

は、夕刊新聞に掲載された『大酒飲みとベルリーンの鐘』および『最近の戦争の逸話』がリヒノフスキー王子の顰蹙を買い、その弁明として書かれたもので、「鼓手の記事」というのは後者のほうを指している。したがってここでは、新聞のなかにおける逸話の娯楽的な機能が取りあげられているのであるが、しかしそうしたことばかりでなく、逸話と他の「民衆のために直接書かれていない」記事とを同時に「通読」させようとする意図がはっきり現われている点にも注目しておかねばならない。もちろん、大衆紙として多様な記事を載せることは当然のことといえるし、それに政治記事や社会記事はクライストによって書かれたものばかりではないので、判断には慎重でなければならないだろう。だが、多様な記事を同一紙面に可能な限り掲載しようとすることは、読者の要求に迎合し新聞を大量に売ろうという経済上の問題にのみ起因していたとはいいがたい。夕刊新聞の発売元であった出版業者ヒッツィヒは、この新聞の紙面のスペースに限界があることを認めたうえで、それでもなおさまざまな記事を載せようとしたのは、自分ではなく編集者であるクライストの強い意向であった旨をはっきり述べている。[46] クライストは大衆紙の機能を活用し、文芸的なものを政治記事や社会記事と相互浸透的に読ませることを意図していたように思われる。

「悪の学校」にみられたような対立の力学による効果は、夕刊新聞に掲載されているクライストの一連の文芸小品のなかにも指摘することができる。ここでは一例として『世界の歩みについての考察』をみていくことにしよう――

> 国家というものはさまざまな時代を経て形成されるものであるが、この形成の過程をまったく不思議な順序で思い描いている人たちがいる。彼らによれば、ある民族ははじめ動物のように野蛮で蒙昧であったが、少し時代が下ると道徳を改善する必要を感じ始め、道徳学をうち立てねばならなくなる。そして次に、この道徳学を近づきやすいものにするために、美しい実例をあてはめて教養を具体化しようと考え、その結果、美学が発明される。この美学の規定に従って美しい具体例が創りだされるとともに、いまや芸術の分野が開かれるのである。この芸術によって、ついに民族は人間の文化の最高の段階に導かれるという。こう

した考えの人たちは、少なくともギリシャ人やローマ人の場合にすべてが逆の順序で起きたということを知ったら、どう思うだろうか。ギリシャ人やローマ人は獲得できる最高の時代である英雄時代に始まった。人間としてまた市民としての徳を具えた英雄がいなくなったとき、彼らは英雄を詩で歌いあげた。詩で歌うような英雄がいなくなると、彼らはその代わりに規則をつくりだし、さらに規則のなかで混乱すると、哲学そのものを抽象した。そして哲学を完成すると、ギリシャやローマの人たちは堕落してしまったのである。(47)

この小品は、これまでクライストの歴史観を知るうえで重要なものとみなされ、しばしば引用されてきたものである。たとえばハンナ・ヘルマンは、クライストが前者の史観を否定し後者の史観に立っていた、とこの小品を読むことによって、人間の現在を至高の状態からの堕落とみなすロマン派的な歴史観をクライストが抱いていたとしている。(48)だが、こうした解釈は、ひとつの史観にたいしてまったく逆の史観を対置する(「接触」させる)ことによる力学上の効果を見落としてしまっている。クライストは前者の史観にも後者の史観にもたっていないのである。むしろ彼のねらいは、人間は進歩してきたし、これからも進歩していくであろうという楽天的な見方を、それとはまったく逆のケースを対置することによって相対化することにあったように思われる。ギリシャ人やローマ人について述べられていることが事実であるかどうかはどうでもよく、これはあくまでも表現上のストラテギーとして機能しているのである。こうした相対化によって、既成の価値感を無意識のうちに受け入れている硬直化した思考を解きほぐし、人間の歴史やいまある人間の状態について改ためて思いをめぐらすように読者の思考を誘発していくこと、そこにクライストのねらいがあったといえよう。(49)

思考の誘発ということは、本論の冒頭に引用した『病院での出来事』という逸話についてもいえることである。まず構成の面からみていくことにしよう。この逸話は三つの部分から成っている。最近馬車にひかれ、しかもこれまでに三

回も同じような目に合っていたバイアーという男から、今回の事故の事情を聴取するために枢密顧問官Kが病院にやってくる。この状況設定が逸話の導入部（Einleitung）を成している。次に男とK（及び医者）とのあいだで交される簡潔な問答が移行部（Überleitung）を形成し、最後に「さて男は回復した。道を歩くときに医者たちに用心していれば、彼はこれからも生きのびることができよう」という落ち（Pointe）で逸話は終っている。クライストの逸話のなかには、検閲による削除によって生じた紙面の空白部分を埋め合わせるために臨時で書かれ、構成の面からみると成功しているとはいいがたいものもある。(50) だが『病院での出来事』は、導入部と移行部がすべて落ちに集約し、その効果を有効に機能させるように物語られており、夕刊新聞に掲載されている逸話のなかですぐれたものといえよう。この逸話のかなめとなっている落ちの部分では、医者とは病気を直してくれる頼りがいのある人という一般の通念が、生きのびるには医者に用心することだという形で完全にひっくり返されてしまっている。社会的に認知されている規範を相対化し、その規範の硬直性を解きほぐそうとする対立の力学による効果をここにもみてとることができる。クライストは既存の通念に逆説的な問いかけを試み、それによって読者自身の意識を挑発し、自らの抱いている価値観を今一度反省させるきっかけを与えようとしているのである。この構図こそ、クライストの逸話の基調を成しているといっても過言ではない。

それにこの逸話が実際に起きた事件をもとにして書かれている点についてもここで触れておかねばならない。夕刊新聞第七号に次のような記事が載っている──「まだ名前は公表されていないが、昨日ケーニヒス通りである労働者がグラーペンギーザー教授の馬車にひかれるという事故が起きた。だが傷は致命的ではないとのことだ。」クライストは逸話の娯楽性を強調していたが、日常起こりうるこうした事件のなかに、既存の通念を問題化する文脈がひそんでいることを読者に悟らせていくという機能も逸話に託しているのである。クライストの逸話の多くが三面記事的な要素をもち、

夕刊新聞に掲載されているその種の記事と微妙に調和し合っている点に改めて注目しておかねばならない。

クライストは夕刊新聞の実質的な序文にあたる『ゾロアスターの祈り』のなかで、「言葉の箙」から取り出された「ときには鋭いときにはやさしい矢」で、「人類が捕われている不可解な堕眠から人類を目覚めさせる」ことが、この新聞の目的である旨を宣言している。[52] いわば覚醒化ということがこの新聞の意図であることをうたっているわけだが、それはこれまでみてきた対立の手法のなかにみてとることができるであろう。

クライストは、読者の思考のあり方や認識のあり方そのものを問う性質をもつ文芸小品を、政治批判・社会批判の記事と同時に読ませることによって、当時の政治や文化のなかに支配していた「閉鎖性」を読者に意識化させることをねらっていたのである。だが、夕刊新聞にこめられたこうした意図は結局失敗に終ることになる。読者は三面記事に関心を示すものの、政治記事には退屈さを感じるのみであった。夕刊新聞は、当初この三面記事のおかげでよく売れたとはいうものの、次第に売り上げを減らし、そのうえ検閲や既存の有力新聞の圧力のために、政治記事や劇評を思うように掲載できなくなった。文芸小品はこうして片肺飛行を余儀なくされ、クライスト自身の執筆意欲も急激に冷却していくのである。さまざまなスキャンダルの種をまいたこの新聞はわずか六ケ月でベルリーンから姿を消すことになる。[53] 一八一一年五月二日の「朝刊新聞」は、「夕刊新聞の命数は尽きた。これで自身も休息できるし、読者も休息できる」という意味の報道を行っている。

だが、こうした時代的制約があったとはいえ、今日夕刊新聞をひもといてみると、そこには、政治的にもまた文筆業者として生きていくうえでも非常に困難な状況のなかで、ひとりの作家が現実にたいしてアクティブに関わろうとした跡を認めることができる。ヴィルヘルム・グリムは一八一〇年一一月二四日の〃ツァイトゥング・フュア・ディー・エ

レガンテ・ヴェルト〃紙にクライストの物語集についての書評を載せている。そのなかでグリムは、クライストの作品のなかに登場する人物やそこで扱われる出来事に常軌を逸した正常でない要素が多くみられる点を指摘したうえで、それらは「日々の単調な習慣のために視界をさえぎられてしまっている眼差しに、より広い高次の視界を与えていく」(54)ためのものである、という主旨を述べている。この書評は、クライスト文学にみられる啓蒙主義的な傾向を指摘している点で、当時はもとより今日でも十分傾聴に価するものである。読者の習慣的な思考に通常とはまったく逆の世界を提示することによって働きかけ、「より広い高次の視界」を与えていこうとするクライストの営為は、夕刊新聞とりわけそこに掲載された文芸小品にはっきり認めることができる。

註

(1) Kleist, Heinrich von: Sämtliche Werke und Briefe. Hrsg. von Helmut Sembdner, Darmstadt 1970, Bd. 2, S. 226-267. (ここからの引用は以下 S. W. で示す)

(2) 浜中英田著『クライスト研究』筑摩書房一九七〇年 S. 526~542 詳細は、Grathoff, Dirk: Die Zensurkonflikte der Berliner Abendblätter-Zur Beziehung von Journalismus und Öffentlichkeit bei Heinrich von Kleist. In: Ideologiekritioche Studien zur Literatur. Hrsg. v. Volkmar Sander, Frankfurt a. M. 1972, S. 35-168.

(3) S. W., S. 840.

(4) Berliner Abendblätter. Hrsg. von H. v. Kleist, Nachwort und Ouellenregister von Helmut Sembdner, Darmstadt 1973, S. 305. (ここからの引用は以下 B. A. で示す)

(5) 浜中英田、a. a. O., S. 536.

(6) S. W., S. 361~367 Grathoff, Dirk: a. a. O., S. 75~77 を参照。

(7) こうしたことはクライストの場合のみでなく、当時のプロイセンの政府自体がオポレオンによって新聞の効果に目覚めさせ

られるという構造がみられた。 Houben, Heinrich Hubert: Hier Zensur-Wer dort? Leipzig 1911 を参照。

(8) Habermas, Jürgen: Strukturwandel der Öffentlichkeit-Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft Neuwied 1968, S. 38-91. 1969.

(9) Grathoff, Dirk: a. a. O., S. 68-69 を参照。ラインホルト・シュタイクは、ツェルターの愛国的な「合唱団」や保守的な「キリスト教ドイツ食卓協会」の会議記録のなかにクライストの名前があることから、彼が貴族を中心とした反体制派党を信奉していたと推論した (Steig, Reinhold: Heinrich von Kleists Berliner Kämpfe. Berlin, 1901)。シュタイクの主張にたいする批判は、これまでもゼンプトナーやパウル・クルックホーンなど多くの研究者によって試みられている。

(10) B. A., S. 63. (Die Ausgabe des Jahres 1811)

(11) Grathoff, Dirk: a. a. O., S. 39.

(12) Silz, Walter: Die Mythe von den Marionetten. In: Kleists Aufsatz über das Marionettentheater. Hrsg. v. Helmut Sembdner, Berlin 1967, S. 111.

(13) B. A., S. 135.

(14) たとえば、Moering, Michael: Witz und Ironie in der Prosa Heinrich von Kleists. München 1972, S. 31～51.

(15) S. W., S. 329.

(16) S. W., S. 329.

(17) S. W., S. 329.

(18) S. W., S. 329.

(19) S. W., S. 330.

(20) S. W., S. 330.

(21) S. W., S. 330.

(22) S. W., S. 330.

(23) S. W., S. 330.

(24) S. W., S. 331.

(25) S. W., S. 331.
(26) S. W., S. 267–268.
(27) S. W., S. 332.
(28) S. W., S. 332.
(29) S. W., S. 332.
(30) S. W., S. 332–333.
(31) S. W., S. 333.
(32) S. W., S. 333.
(33) S. W., S. 333.
(34) S. W., S. 334.
(35) S. W., S. 334.
(36) S. W., S. 334.
(37) S. W., S. 334.
(38) S. W., S. 334.
(39) S. W., S. 329.
(40) S. W., S. 334.
(41) S. W., S. 335.
(42) S. W., S. 335.
(43) S. W., S. 335.
(44) S. W., S. 329.
(45) S. W., S. 840.
(46) Kleist, Heinrich von: Lebensspuren. Hrsg. v. Helmut Sembdner, München 1969, S. 292.
(47) S. W., S. 326–327.

(48) Hellmann, Hanna: Über das Marionettentheater. In: Kleists Aufsatz über das Marionettentheater. Hrsg. von Helmut Sembdner, 1967, S. 17-31.

(49) 『世界の歩みについての考察』が対立・矛盾の法則の視点から読まれるべきであることは、ヴァルター・ミュラー・ザイデルによっても提唱されている。Müller-Seidel, Walter: Versehen und Erkennen—Eine Studie über Heinrich von Kleist. Köln 1971, S. 117-119.

(50) Sembdner, Helmut: Neuentdeckte Schriften Heinrich von Kleists. In: In Sachen Kleist-Beiträge zur Forschung, München 1974, S. 132-134.

(51) B. A., S. 30.

(52) S. W., S. 325-326.

(53) 浜中英田、a. a. O., S. 542 からの引用。

(54) Kleist, Heinrich von: a. a. O., S. 273.